



2014年
を振り返る

「へえ、あれがズヴィズダーの首領」
「昨日はもっと元気だったんだけどな。憎まれ口叩いたり」
「これ、何やってんだ？ もうなんか、意識ないみたいけど」
「犯しまくって、ズヴィズダーのトップの痴態を放送して、
一度とああいうことをする輩が出ないようにするんだと
完全に抵抗しなくなるまで、調教するのが俺らの仕事」

あー…

あー…

「んなことしなくても、世界征服しようとするやつなんて、
もう出てこないだろ……。もしかして、後ろのアレは」
「ああ、おまんことけつ穴にぶつ刺さってる」
「うへえ、あの体に二穴責めとは……。」「動かしてみるか？」

ビクンッ

ビクンッ



「あー……っ！ あっ！ んぐっ……ああああー！」
「すげーあんなふうに動くんだ」

「あいつ用に調整してあるから、効果半端ないぞw」
「おっ！ はあっはあ……んんっ！ あああんー！」
「いいいいいいっ！ いくっ！ いくっ！ いくっ！ いくっ！ いくっ！」

ガク

ガク

ブルツ





「すっげえ……あそこまでイクんだw」
「引き継ぎだけど、あいつが寝そうになつたらこれで起こす感じで」
「でも、もったいねえな。折角なら機械じゃなくてハメてえな」
「調教完了したら、やつてもいいつてさ」
「マジか！ 楽しみ」
「まあ、アレで調教終わつてないつてどこまでやる気なんだか」
「完全に墜ちていると思うけど……廃人にでもする気かな」
「廃人とセックスはしたくねえなあ……」
「俺は逆に燃えるけど？」
「じゃあ、あとは適当に楽しんでくれ」

おっ♡

ガッガッ

キョッ♡

ガッガッ

ゲーム制作部の高尾部長と遂にセックスまで持ち込んだ！
どうやら、恋愛で悩んでいるようだったので、
処女はモテない、セックス下手だと付き合ってもつられると、
さりげなく、不安を煽っていったら、
股開いてくれました！ 処女ゲット！



「うひょー...感じっ！」

「うひょー！ 騎乗位で下から見上げる巨乳は最高だぜ！
最初はゆっくりでもいいから、自分が気持ちよくなるように動いてみて」
あくまでも優しくアドバイス。
「んっ...んっ...あっ」

高尾部長は小さくあえぐ。
腰のぎこちないグラインドと胸の揺れが俺の股間を更に硬くする。

「ああん...んんっ！ んっ！ ああ...」

「あっあっ！ あんっ！ はあはあ...あああっん！！」

「えっ...どうして？」

不安そうな顔をする高尾部長。自分に問題があると思っっているのだろう。
「まだ、慣れていないみたいだからね。ゆっくり上手くなるう」
と、俺は心にもない優しいげに聞こえる言葉をかけた。

——翌日。
きつと、高尾部長はセックスのことで頭がいっぱいだっただろう。
あんな中途半端なところでヤメたのだから。
「じゃあ、今日も騎乗位練習しようか。昨日みたいに好きに動いて大丈夫だよ」
高尾部長は、不安げに俺のチンポに跨がり、
ゆっくりとそれをマンコに受け入れ、ゆっくりと腰を動かす。
「んっ……んっ……」



今日は昨日と違い、俺も腰を動かす。どこがこいつの弱点かは昨日把握した。
「んっ……んっ……」
高尾部長は今までにない声を上げる。
「ん……ぐっ……それ、いいよ」
俺は快楽を我慢しているような声で言う。もちろん、演技だ。
もちろん、この間もまんこの弱点はチンポ責め続ける。
「はっ！ はっ！ んっ！ いいっ！ んっ！ ああん！」
褒められて気をよくしたのか、あえぎ声に艶が出てきた。
こっぴどく、認められているという実感、そして快楽を与える。
俺は一週間ほど、これが続けて、
「これで、もう大丈夫。絶対に上手くいくよ」
と、優しく声を掛け、高尾部長を手放すことにした。

それから、一ヶ月ほどで高尾部長は俺の元に帰ってきた。
「おおおっ！ んんんっ！... ぎもちいいい！...！」
そして、前より激しく乱れながら腰を振っている。



高尾部長は、目当ての男に告白した。
告白は成功し、付き合ったが——セックスが上手くいかなかった。
それはそうだ。
セックスに対して、無意味な自信を付けたこいつは、
今まで通りのセックスをしただろう。

でも、相手はそれを褒めてくれないし、
俺のテクニクがなければ、自分は気持ちよくなれない。
相手だけが気持ち良くなる、気持ちはすれ違う、上手くいくはずがない。
不安になったこいつは、俺とのセックスで自分が間違っていないか、
確かめようとする。

そして、俺とセックスをして——相手が間違っていたと確信する。
そうすれば、気持ちは離れるし、そういう女を堕とすのは簡単すぎる作業だ。
「いぐっ！ いぐっ！ ああああぁんんん！...！」
こうしてセフレがまた一人増えた。

「しゃぶらせてから言うのもなんだけど、こいつなんなんだ？」
「なんか分からねーけど、プラモデルを戦わせる選手、って言ってたぞ」
「はあ？ なんだそれ？」

ちゅっぴ

じゅっぴ
ほお

「それで勝てねーと、肉便器にしかなれねーってことを分からせるために、こうしているんだと」
「へー……プラモデルねえ……」
「まんことアナル使わなきゃ何してもいいってよ」
「なににせよ、タダだしありがたく頂いておくか」

「おっ、今日もいるじゃん、アイラちゃん。すでにザーメンまみれだけど」
「しかし、こいつ相変わらず何も喋らなくてつまらねーな、嫌がったりあえいだりすりゃいいのに」
「しゃぶりはするのにな」

ズユポ
チュッパ

「うまくねーし。でも、こんだけザーメンまみれでペラペラ喋る女も気持ち悪いなw」
「そりゃそーだw でも、まんこは濡れてるぜ、ちんぽにマン汁が伝わってくる」
「どんなに澄ました顔してても、所詮メスだな。下の口は饒舌」
「だから、うまくねーって」

ム
ロ
オ

アリアの作った津田のペニスを探寸して作ったバイブー！。

ドキドキ

最初は家で使うだけだったが……遂に学校に持ってきて、
しかも挿入したまま、壇上が上がってしまった。
バレるかもしれないと思うと……鼓動が意図せず早くなってしまう。

ドキ

「今月は……美化清掃……強化月間あつ！……です」

ほっ♡

ん♡

ダメだ。とてもではないが、普通に喋れない。
ただ、月初の連絡事項を言うだけなのに。
それもこれも、全部津田のチンポが悪いのだ。
なんで、こんなに相性抜群なのだ。

トロー……

「んはっ！ あああん！ げげちゅ、月末には……」
急にバイブの動きが激しくなった。

あゝん♡

ゴクゴク

〜ブブブ
ブブブ

ピクッ

このバイブには前日の津田のオナニーにあわせて、
動きが変わる機能がついている。
つまり、昨日……津田はこのタイミングで……。
津田のことを考えると余計にまんこの感度が上がってしまう。
耐えられそうにない。

「おおおっ！ おほっ！ いぐう……いぐう……いぐう……」
「こんなところで果ててしまった。
それと同時にパイプの動きも収まる——。
やはり、津田とは相思相愛なのだ、ここまでタイミングが一緒だなんて。」

ガク
ガク
ガク

ガク

はあ♡

はあ♡

はあ♡

「七条先輩……会長は今どこに？」
「今は空き教室で明日の演説の予行練習をしているみたいよ」
「へえー、真面目ですね」
「ふふふふ」

ペニスデリバリー。
メタモルペニス星人の
「メスの体液を吸収し、
そのメスに一番適した生殖器にメタモルフオーゼする能力」
を活用した大人気のサービスだ。
男日照りのスカーレットもご多分に漏れず、このサービスを利用していた。



「すごい……ペニス、太くて……硬くて、大きくて」
スカーレットは恍惚の表情でペニスを見つめる。
普段はお堅い彼女も、このときだけは「メス」になる。



「んあっ……んんっ……びさあ」
うっとりとした顔で、ペニスを愛撫する。
本能的に求めてしまふ「のペニスの魔力には、どのメスも逃れられない。」
「んむー……ちゅ……ちゅ……ちゅ……」

「す、すごい……んんっ……もう少し……」
ピュリユルル！
メタモルペニス星人のペニスから、疑似精液が吐き出される。

この疑似精液には体液を採取した
メスの性衝動を高める臭いが混ざっている。

「あっ……んんっ……すごい……におい……」
だが、決して、メタモルペニス星人とセックスしてはならない。
セックスをすれば、メタモルペニス星人の苗床となってしまふからだ。
しかし、メタモルペニス星人の最適ペニスに勝てるメスは、いないという。
遺伝的に最高の相性なのだ、当然の帰結であろう。
——こうやって、メタモルペニス星人は子孫を増やすのである。

ユルル



——火々里さんの行方がわからなくなってから数日後。
携帯に知らないメールアドレスから動画が送られてきた。
そこには、いわゆる駅弁の体勢でセックスをする火々里さんが写っていた。

ニユチュ



「あっ、んっ……はあん……」

一度も聞いたことのないかがりさんの甘い声。

心臓が不快な程、早く強く打ち始める。

見たくないが再生を止められない。

助けなければという気持ちと裏腹に股間は怒張し始める。

ズイチュ

「んっっっ！ あっ！ あああああんっっっ！」
火々里さんが顔を上げた……快樂を耐えている顔。
このとき、僕は絶望した。
それは、火々里さんが犯されていることにでも——
かがりさんがあろくでもない感じが漂う男のちんぽでよがっていることにでもない。
絶望したのは、僕にはかがりさんをセックスで喜ばせることができないという事実からだ。

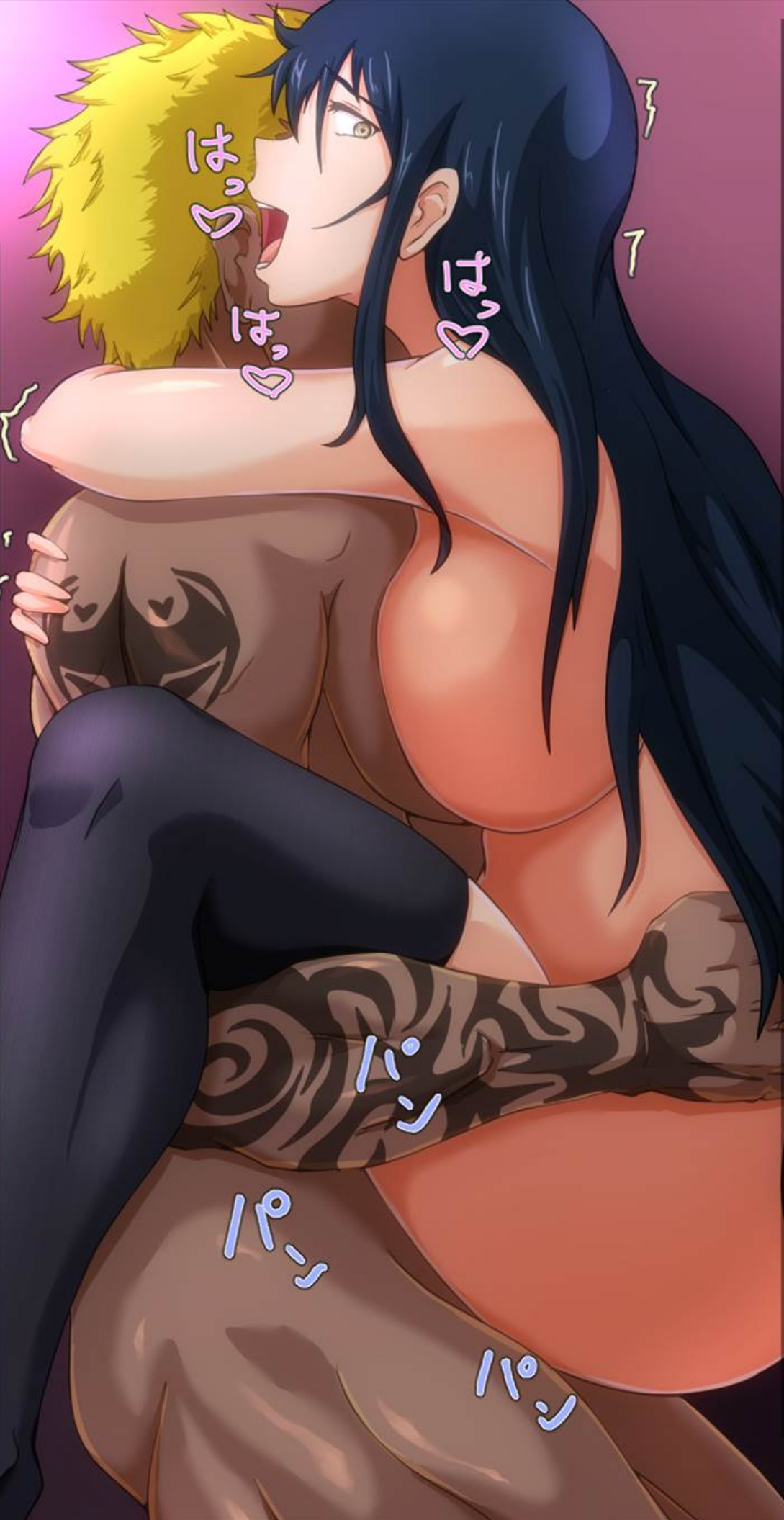
ズン

ズン



僕には絶対にあの体位はできないし、あんなにペニスも大きくない。
きつと、セックスをしたとしても、この映像のように火々里さんを満足させることはできないだろう……。

「ほら、カメラに向かって、なんか言えよ」
「あつ……んぐつ……あつ！ おちんぼ大好きいい火々里綾火ですううんあああああ！
これから、中にいっぱい………んんっ！ 出してもらいますううう！
ああん！ この人に、おおおんっ！ 処女をささげてえ、あはっ、正解でしたあああああああ！」



——このあと、この動画の情報をもとに火々里さんは助けられた。
数々の罠により魔力を奪われ、更に、クスリによってああいう状態にされたようだ。
だけど、僕は二度と火々里さんに向かい合えないだろう。
彼女にできることは——何もないということに分からせられた。



「っ！ 離してっ！」

「いやですよ。俺たちみたいなのは人間は、」

「この期を逃したら金髪美少女とセックスする機会なんてないからねえ」

「こんなことして……どうなるか分かってるの？」

「さあ……？ でも、ここで千棘ちゃんとセックスしなければ、」

「一生後悔することは分かってるよお」

「何、馬鹿なこと言ってるの？」

「楽だけにいい思いさせてるのも、嫌だからなあ」



「いいと思うっ」「お願い……」「だめですう」

「じゃあ、そろそろ始めようかあ」「ちよ、ちよっと、嘘でしょ、やめて。ね。」「で、やめたら、なかったことにするから裸見れたんだし……もういいでしょっ」

「一番槍頂きますっ!」
「う……う……」

「千棘ちゃんのおまんこ、あつたかくてきもちいい!」
「抜いて! 抜いて! お願ひ!!」
「オツケイ! 射精したら抜く!」

ズ
ズ
ツ



「んっ……いっ……ぜ、絶対に……ああん……許さない」
「許さなくていいよお。それに、絶対俺らにマワされて良かったって思うよお」
「ああっ！ あっ……そ、そんな……んんっ！」
「思うわけ……あっ……ないじゃない」



「千棘ちゃんが仲良くしている、
小野寺さんや鶴さん……宮本さんや橘さんも俺らとハメまくってるよお」
「う、嘘……んっ……はあん……そんな……鶴が……んっ……あんたらなんか」
「なんか、色々と鍛えたりしているみたいだけど……所詮、女の子だからねえ」



「これで全員とセックスしたけど……どうっ
俺らの玩具もいいでしょお？」
「ひゃい……あああああん！」
「今日でちんぽ好きになってくれたかなあ？」
「おひんぽ……だいすき……ですうううう……」
「あああああん！ はあはあ……いくっ……」

「明日は、小野寺さんも混ぜて、みんなでセックスしようねえ」
「あっ……あー！ うっ……ぐっ……ああん！」
「はい！ はい！ はあああああい……！」

「へえ……わたしに負けたこと、まだ気にしてたんだ」
「……ぐっ」

「で、その屈辱を忘れないように——足コキって……サイヤ人の考えていることはわけが分からないね」

ぐ

ぐっ

「うっ、うるさい！ 黙れ！ 金は払っているんだ！
それに屈辱を忘れないためではない！
自分への怒りを高めるためだ！」

「まあいいけど、それにしても情けないね、
チンポを足でいじられて、こんなに勃起するなんて」
「ぐっ………続ける！」

「それに、今日の金だって、ブルマさんの金だろ？
嫁に隠れてホテルまで予約して、何やっているんだか」
「ち……ちくしょう！」



「ほら、早く出しなよ、わたしはこれからクリリンとデートするんだから」
「なら、もっと上手く動かして見せろ！」
「いちいち、偉そうだな」

「な、なんだとお！」
「……………」
（なんだ、この勃起力……足がちんぽに押し戻されそう
……………それに……凄く……硬……………）

ゴッ

「んぐっ……………」
「なんだい？ もう果てるのかい？ 尿道が膨らんできたよ……………早漏」
「う、うるさいー！」



「やっぱ、早いじゃないか——早漏王子」

「ち……ちくしょう……ちくしょう」

（なんだ、このザーメンの量……）

……しかも……一発で意識が飛びそうなくらい

……濃い……臭い……）

「はあ……はあ……」

「あえいじゃって、可愛いねえ」

♡キーン♡

♡キーン♡

ドロオ

（えっ、こんなに出したのに……もう勃起が回復

……しかも、さっきより硬い……し、大きい？

これで、まんこかき回されたら……どうなっちゃうんだろ……

あんな、濃いの中に出されたら……

……一回ぐらい、いいかな

100万ももらっちゃってるし……

足コキだけじゃ……逆に悪いし

でも……どうやって……なんて誘えば……）

「もう、終わり？ もし——」

「カカロットオオオオオオオオオオ！」
「……………!! ビビった……………こいつ、なんで急に叫んだんだよ」
「……………カカロット？」
「ちくしょう!! ちくしょう!! ちくしょう!!」
カカロット! カカロット! カカロット!!

「うわぁ……………なんか……………泣き始めたぞ、こいつ……………」
「カカロット……………」
「(なんで、孫悟空の名前を連呼しているんだ……………)」
「これで終わりだ! 俺はシャワーを浴びて帰る!」
「わ、分かった……………」
「……………やっぱ、クリリンが一番だね。臨時収入入ったし……………
今度マローン預けて、ホテルでクリリンと一日中やりまくる)」



「あっ！ 花村！」
「さ、里中……お前……何を……」
「セックスだよ！ セックス……んっ！」

（悠がいなくなってから、里中の様子がおかしいって……天城が言ってたけど……これは……）


「あっ！ あああん！ は、花村もする？」

「おい、勝手なことするな。順番決まってるだろ」

「んんっ！ ごめーん！ あっ！ はあん！ いっ……」

「帰れ。もし、やりたきゃ、きちんと金払ってから来い」
「か、金って……」





思ったより早く研究に目処がつき、少し早く帰れることになった。
家に帰ると、どの部屋の電気も点いていなかった。

(ちさきは……出掛けているのか)

だが、ちさきの部屋に近づくと、少しだけ物音がした。

「あっ……やっ……」

(ああ、そういうことか)

ちさきはオナニーをしていたのだろう。

そこで、少し悪戯心が芽生えた。

驚かせてやるうと——思ってしまった。

俺はふすまを開け、部屋の電気を点けた。

ガアッ

コトッ



月並みだが、心臓が止まるかと思った。ちさきの上に、真っ黒に日焼けした男が覆い被さっていた。歳はきつと五十近いだろう。そんな男が、妙に滑らかな腰使いで、ちさきと交尾していた。ちさきが、「こちらを向く。」目があつた。その視線で察する。これは望まぬセックスなどではなく、ちさきの望んだセックスなのだ。怯えと驚きの中にほんのすこし申し訳なさの混ざつた——「おう、ちよつと、このまんこ、借りてるぞ。邪魔だからどっか行つてろ」男は野太い声でこちらを見もせずと言つた。「もし、「こ」までだつたら、ちさきとの関係は修復できたかもしれない。一度の過ちとして許せたかもしれない。」

ちよ



次の瞬間、ちさきは顔を背けた。
それは、申し訳なくて目をそらした、という行動ではなかった。
セックスに集中するために、相手の方を向いたのだ。
「いっ！ そ、そんな激しく！ やっ……んっ！」
「彼氏のちんぽじゃ満足できないんだもん。しかたねーよ」
「そ、そんな……ああああああん！ はっ！ はっ！ はっ！ いい！
俺はふすめを閉め、その場へあたり込んだ。
「いっ！ いっ！ いっ！ あっ、あんっ！」
「イクのは何回目だあ」
「やっ……んんっ！ はっ……きよ、今日は……あんっ！」
……十二回目、で……んああああっ……！」
「ううして、俺とちさきの関係は終わった。」

はっ♡
はっ♡

ズッ
おっ！

「皐月様、準備完了いたしました」
「始めろ」
行うのは快楽に耐える訓練だ。
この先、戦いは激化するだろう。
万が一、捕らえられることもあるかもしれない。
そのとき、快楽に溺れるようでは——話にならない。
……慣れぬものだな……この異物感
挿入されただけで、体が、じわっと熱くなるのを感じる。
これから、薬と振動による責めが始まる。
これに耐え切れれば、どんな状況でも墜ちることはないだろう。
「ふ……ふ……」
呼吸を落ち着ける——。
「3、2、1………始めます」





「おおおおおおおっっ！ おほっ！ いいいん……ああああー」
その快楽は今までの比ではなかった。
全身がクリトリスになってしまったかのような感覚。
周囲の空気ですら、快楽だ。

「おっほっおほおほ！ ひっひっ！
いいいいいぐく！ ききき、きたあ……」
「おい、大丈夫か……白目剥いてるぞ」
「皐月様を愚弄する気か。大丈夫に決まっている」
そんな会話が聞こえてくる。

しかし、何も反応できない。快楽の霧が脳を蝕み、体の自由がきかない。
体が、ただただ、性的快感を受容するための装置になってしまったようだ。
「いいいっ！ いいいいい！ あああああっ！ はあはああああああー」
「しかし、皐月様はこのところ、毎日、この訓練を行っておられるぞ……
お体が心配だ」

「……まるで、皐月様が快楽の虜になってしまったとでも言いたげだな」
「あ……そんなつもりは……」
「あ……あ……」
「ピクンと体が痙攣する。それすら——気持ちいい。
ごめんなさい！」「ごめんなさい！」
鬼龍院皐月は見られながらのキメアクメ大好きなド変態ですうう！

「どうせ、床オナでもしすぎて、膣内射精障害になったんでしょ」という不用意な一言のせいで、今の状況はある。この発端は、富樫君から六花ちゃんとセックスしても射精できない、という悩み相談を受けたことだ。そこで、つい、あんなことを言ってしまった。デリケートな悩みのはずなのに。それから、口論はどんどんエスカレートして、最終的に、私の中で射精できたら六花ちゃんが悪く、私の中でも射精できなかつたら、富樫君が悪い、ということになった。売り言葉に買い言葉でこんな状況になってしまった……。富樫君がコンドームを持っていたことが唯一の救いだ。

ニヤニヤ

トクレン

じゃ じゃ

「絶対に、富樫君はイケないと思うよ」「そんなことねーよー」「今更ながら、すくく……恥ずかしい。しかも——部屋だなんて、初体験なのに。」

「んんっ……んんっ……はっ……はっ……はっ……」
勝手に声が漏れちゃう……。
一人でエッチするのは、全然違う感覚。
富樫君の、硬いおちんちんが、指では届かないところを、ぐいぐいと刺激する。
「はあ……んんっ……ちよっと……うっ……ああん！……動きすぎ！」
このままじゃ、どんどん気持ちよくなっちゃう。
少しペースダウンしないと……。

「それじゃ、イケないだろ！」
富樫君は怒った口調で言うと、更に私を突き上げた。
「ああん！……いっ、んんん……はあ……はあん！」
軽くイっちゃった……。
薄めを開けて、富樫君を見る。少し苦しそうな顔……？
もしかしたら、気持ちいいのかも？
私は、がんばって少し腰を動かしてみる。
「……うっ」
富樫君が小さくあえいだ。

あん♡

はっ♡

はっ♡

タプッ

たゆん

グチュ

ニチュ



「……」
私が四回目の絶頂を迎えるのとほぼ同時に、
富樫君が一際大きいあえぎ声を上げた。
同時に、中の富樫君のおちんちんが、びくんびくんと脈打ちだした。
「……いった……のかな？」
私の中で、おちんちんが膨らんだり、小さくなったりしている。
「……なんだろう、この幸福感」
気持ちいい——というより、嬉しい。
コンドーム越しに伝わってくる、体温とは違う熱が愛おしい。

ハアハア
ハアハア

ドクン
ドクン

「出たね」

「……ああ」

「……めんね」

「……いいよ、俺も熱くなりすぎた」

「……これからさ——ときどき、私とエッチしようよ。」

「私もす——く……気持ちよかった」

「この言葉は自然に出てきた。」

「しかし、言ってるから、ものす——く、恥ずかしくなった。」

「……こんなの『セフレ』『トシてくれ』と言っているのと同じだ……」

「——でも、本心だ。」

「……その、俺からも頼む」

「ありがとう」

「これからも、富樫君と、セックスができると思うと、
胸がどきどきして——あそこがうずき始めてしまった。」

「……………ん……………」

「ようやくお目覚めか」

「な、なんじゃ、この格好は…？」

「楽しんでもらおうと思ってる」

「……下衆め。こんなことをしてどうなるか分かっているだろうな？」

「少なくとも、今日一日は普通の女の子と同じ程度のことしかできないはずだぜ」

「たわけ、自分の体の状態ぐらい分かっておるわ——わしの仲間が黙っていないという「ん」とじゃ」「はははははははは」「何がおかしい……………？」「耳を澄ませてみる。聞こえないか」「この……声は……」「全員、お前みたいに便所にぶち込まれて、犯されているよ」「ぐっ……………絶対に許さんぞ」



「で、さっき、自分の体の状態が分かっているって言ったけど——本当に分かっているのか？」

「体が熱い——全身が疼く——頭がぼーっとして——それくらい分かっている——じゃが——」

「じゃあ、さっそくハメさせてもらっせ」

「んっぐ——あああ——」

「いい声じゃん。まんこもトロトロになって最高」



「んんんっ——何故、——こんなにやああああ、こんな——とを——ああんん！」

「この学園の女を買いたいっていうお金持ちがいてねえ——売るんだよ」

「あっ！ あっ！そ、そんな「おおおん！いいいいいいいん！おっ——」

「何言っているか分かんねーけど、こうやってチンポ入れられている内が華だぜ」

「あっん——んんっ！はあ——」

「お金持ちの方々はもっと、ドギツイもんぶち込むらしいからなあ.....人生終わるくらいの」



「はあはあはあ……なんじゃ……その……程度か……」
（こんなことを言ったら……もっと責められ……でも、気を強く持たんと……墜ち……て……）
「体びくびくさせながら、強がって……可愛いねえ」
「はあ……ぬかせ……」
「いやあ……ちよっと、あんたのタメにね、色々と準備してやろうと思ってね」
「……それを……どうする……」

「ひっいいいん！ そんなあ——無理にい！ うっ……んんっ！」
「マン汁垂れまくってるから、すんなり入ったぜ」
「おっ……おっんん……ああんん！ んああああ！ なんじゃ……この……振動おおお！」
「気に入ってもらえたようで何より、特別製のローターだ。アナルよりも——まんこに来るだろう？」
「はっ！ はっ！ はっ！ んんんっっっ！」

「まっ、こんな優しいもん入れてもらえるのは人生で最後だぜ、
基本、あいつらのいれるもんは血が出るし、大体死ぬからな」



「じゃあ、そろそろ、出すぜ」
「んんんっ！ 出てる！ でてりゆ！ あああんっ！」
「ふー、出した出した。悪くないまんこだったぜ」
「はあ……はあ……」

「あーそつだ。もし、俺のオンナになるなら……
売らないでやってもいいぜ、飼ってやる、どうする？」
「な、なりましゆ！ わしは、あなた様のお……
おまんこ奴隷になりましゆっつっつっつっつっつっつ……」



次の大会に向けて、機体を改修するため。私は、賭けガンのラバトルに手を出してしまいました。もちろん、セカイ君や、ユウ君には秘密です。でも、二人の足手まといにはなりたくなかったから——。最初は順調だった。着実に勝ちを重ね、五万円も勝ってしまった。これだけあれば十分のはずでした。でも、欲が出てしまいました。

ガクガク

ブルッ

それから、少しすると、中年の二人組が来ました。

所謂、ファーオト世代。最近の事情を知らない——言ってしまうえば、カモだ。

私はこの二人のおじさんから、更に五万円勝ちました。

そこで、このおじさんたちは、二対一での勝負を持ちかけてきました。

もちろん、賭け金は同じではなく、私は二十万円をかけ、おじさんたちは百万円をかけるという勝負です。

私は調子に乗って、この勝負を受けてしまいました。

さつきまでの試合を考えれば、二対一でも負けそうになかったし。

だけど、おじさんたちは急に使用する機体を変えてきたのです。さつきまでは、マックス塗り仕上げの、いかにもという、こてこてのジオンモビルスーツを使っていたのに、いきなり、ユニオンとバンコイを持ってきたのです。しかも、今風のキレイ目な塗装と、金属パーツをふんだんに使った機体。

ガクガク

ブルッ

私は、おじさんたちの連係プレイの前に、あえなく敗北した。——つまり、十万円足りない。手持ちを入れても八万円以上足りない。手が震える。どうしたらいいか……分からない。賭けガンバラバトルをしていることがバレたら、出場停止だ。ユウ君やセカイ君に迷惑はかけられない。誰にも頼れない。私は「必ず返します」と、おじさんたちに土下座しました。だけど、おじさんたちは許してくれませんでした。結局、体で払うことになりました。

まずは、おじさんたちと記念撮影。
加齢臭……汗、油、色々な臭いの混じったくっさいちんぽが顔に押しつけられます。
これに犯されると思うと……歯の根が合わなくなってきました。

股を大きく開かされました。
スパッツ越しに、あそこが丸見えです。
怖さと恥ずかしさで、気がおかしくなりそうです。
後悔しかありません。なんで、あんなことしちゃったのだろう。
普通に、お小遣い前借りして——その範囲で改修すれば良かったのに。

ガクガク

ブルッ



それから、二時間、みっちり、おじさんたちに犯されました。
ユウ君やセカイ君といつもセックスしている私ですが——
おじさんたちのセックスは次元が違いました。
ねちっこい熟練の技と歴戦の勇士のようなちんぽに責め立てられ、
私は何十回もイカされてしまいました。

世の中に、こんな気持ちのいいことがあるとは、知りませんでした。
途中から、恐怖も後悔も消えていきました。
それどころか、負けて良かったとすら、思ってしまった。
多分、もう、このおじさんたちとのセックスじゃなければ満足できないでしょう。

ド
ロ
ォ
〜

ベ
ト
ベ
ト



そのあと、もう一度記念撮影をしてから、おじさんたちに説教されました。大会に出ることが決まっているのに、賭けガン〇ラバトルをしたこと、賭けガン〇ラバトルで無謀な勝負を受けたこと……色々怒られました。私は泣きました。自分の愚かさが恥ずかしくて仕方ありませんでした。ひとしきり説教をすると、おじさんたちは「腹減っただろう、飯食うぞ」と、私を焼き肉に連れて行ってくれました。

食事のあと、おじさんたちは、積みプラや余っているパーツなどをくれました。その上、ガン〇ラ作成の技術、戦術についても色々教えてくれました。フアー〇ト世代を馬鹿にしていた私でしたが、改心しました。やっぱり、宇宙〇紀が一番なんです。これから、週一回、おじさんたちは、大会に向けて、私に特訓をつけてくれることを約束してくれました。すごく楽しみです。

——これから、毎週おじさんたちとセックスできるだなんて。

ベト
ベト

ドロ
オ



「待て！ 撃つな！ 常守監視官が体を張って犯罪係数を下げている……パラライザーが使えるようになるまで待つんだ！」
「えっ……どう見たって……レイプじゃ……」
「男は賢者モードに入ると、犯罪係数が下がる傾向にあるんだ」「それ、マジで言っているんですか？」
「とにかく、ドミネーターを構えて、ガラス越しだから手を出せない——という風を装うんだ」



「……………まだ、終わらないんですけど」
「待つんだ」
「先輩の顔がもう……………」
「常守監視官の努力を無駄にする気が！」



「こんなこと続けていたら、先輩が濁っちゃいますよー」
「なら、見てみればいい」

「すごい……なんで……なんでこんなにクリアなの……」
「常守朱というのはい……そういう人間だ」

「でも……なんか、ほんとに……意識的なやつなんですけど」
「待つんだー」

（まさか宜野座さん……先輩のこういう姿を見ただけじゃ……
先輩は、さままあミロって感じだけど……こんなのずっと見ていたら、
私まで濁っちゃっ……早く終わらせて、セラピー受けないと……）

セッ
セッ

あー♡

ハアハア

矢野先輩に絶対に頼ってはいけなと言われていた、フリーのアニメーターさんに仕事を頼みにいくことになりました。もう、この人しか手がないからです。この人に断られたら落としてしまいます……。インターホンを押し、部屋の中に入ると、私は思わず吐きそうになりました。臭い。それも、酷く。

「えーと、武蔵野アニメーションさんだっけ」

その太った、不潔そうな男は、なんだか鼻につく口調で言いました。

「はい！ 武蔵野アニメーションの宮森あおいと申します！」

もちろん、お願いする立場なので、営業スマイル全開で挨拶です。

「まあ、ぶっちゃけ、俺、忙しいんだわ」

彼の名前は色々なところで目にします。仕事が早く、技量もあることで有名です。評判はあまり良くないですが、それでも、使わないといけなほどの人物です。

「でさあ、色々と便宜を図ってくれるっつーなら、考えなくもないんだけどね」
「便宜……といますよ」と
「フェラしてよ」
「……………」

矢野先輩が頼ってはいけないと言っていたわけが分かりました。
「別にヤラせろってわけじゃないよ。忙しいから溜まってるんだよ。
もちろん、タダとは言わない、二万出すよ」
「えっ……………」

二万……心揺らぎました。私の収入からすれば——大金です。
その上、仕事も受けてもらえる……………。

「……………」一回だけなら」

男は、にんまりと笑い、服を脱ぎ始めました。
そのとき、私は後悔しました。
大きすぎる。

「一応、ザーメンは飲む決まりだから」

モジモジ

ジュホ。

チュ

モジ...

男は、私を壁際に座らせると、頭をぐっと抑え、ペニスを口の中にねじ込みました。臭いと、口の中の圧迫感で、苦しくなります。でも、我慢をして、平静を保った顔で、それを受け入れます。

「ただ、歯立でないようにしていきければいいから」

男はそう言って、腰を動かして始めました。

ペニスの先端が、のどの奥の方に触れる度、苦しくなります。

ペニスの動きのせいで、意図せず、口から下品な音が漏れるのが酷く不快です。

一分も経っていかないのに、顎が痛くなってきました。

そして、体に異変が起き始めました。

こんなに、苦しくて、臭くて、嫌なのに——あそこがキュンと反応したのです。

私は悟られないように、心掛けるのですが、おまんこがどんどん切なくなります。

「思い出した、武蔵野アニメーションって矢野ちゃんがあるところだ」
口が塞がっている、私は何も言えません。
でも、なんとなく察しました。矢野先輩も同じようなことをしたのではないかと。
「矢野ちゃんは俺の十番目くらいの便器なんだけど、
後輩超越すとかいいとこあるじゃん。ちよつと順位あげてやる」
「便器」という単語を聞いたとき、嫌悪感はありませんでした。
一瞬ですが——憧れのようなものを抱きました。
このペニスの便器になれるなら…….と思っしまいました。



チュ

ジュホ

モジモジ

モジ

「うっ、出る！」
私が呼吸のしづらさと、顎のつらさで意識が朦朧とし始めたとき、男は遂に射精しました。
「ん……んんっ！」
口がペニスで満たされていたというのもありますが、
飲み切れず、口から精液があふれ出して来ました。
更に、男はその状態でまた、腰を動かし始めました。

ド
ボ
キ!!

ゼクッ
ッ

ッ



「ふう……」
男は息を吐くと、ようやく動くのをやめました。
「じゃあ、仕事は受けさせてもらおうよ」
苦くて濃いザーメンが、喉にへばりついているのが分かります。
でも、もう不快感はありません。
「で、もう一つ提案なんだけど、俺の便器にならない？
なるなら、仕事優先的に受けてあげるけど？」
断る理由がありませんでした。
あとで知ったことですが、この人が業界で評判が悪いのは、
恋人や奥さんを寝取られた人が沢山いるかららしいです。
まあ仕方ないことだな……と思いました。
このおちんぽを前にして断れる人の方がおかしいです。

